

## 足尾鋇毒問題と学生運動

小松 裕

はじめに

最近、戦後史の一つの重要なターニングポイントとして、一九六八年が取り上げられ、その意義が様々に論じられている。<sup>1)</sup>そして、一九六八年の重要性というとき、その一翼をなすのが学生運動であったことはいうまでもない。しかしながら、きわめて残念なことに、日本の学生運動の歴史を、戦前と戦後を通観して、一定の視座からきちんとした形でまとめた研究は、管見の限りでは、まだ一つもない。<sup>2)</sup>

ここで目を戦前に転じるならば、学生運動の歴史をまとめようとした最初の試みは、菊川忠雄の「学生社会運動史」(一九三二年、中央公論社。のち増補改訂版が海口書店より一九四七年に刊行)であったといえる。<sup>3)</sup>菊川は、「学生社会運動」を、次のように定義している。広義には、「学生の立場に於て行ふすべての社会的運動」のことであり、狭義には、「近代資本主義社会に於ける無産階級の構成分子であることを自覚」した学生運動をさす、と。菊川の定義の特色は、さすがに菊川自身が第一次世界大戦後の学生社会運動の担い手の一人であったこともあり、学生の「階級的自覚」を重視している点にある。だから、菊川によれば、学生社会運動の起点となるべきものは、一九一八年の東大新人会の結成に求められることになる。

足尾鋇毒問題と学生運動(小松)

## 足尾鉍毒問題と学生運動（小松）

しかし、学生が無産階級に属するかどうかという性格規定はさておき、社会的身分が学生である人々が集団で政治的社会的問題に関して運動を行ったものとしては、一八八五（明治一八）年一月一八日に東京上野公園で開催された有志大運動会を、その最初の事例として指摘できる。この運動会は、朝鮮で発生した甲申政変を機に、清国に対する強硬論を喚起しようとした学生たちが発起し、東京府下の各種学校の生徒が多数参加して行われた示威運動であった。

ただ、この運動に参加した学生たちは、そのほとんどが私塾の性格を強く残す私立学校に在籍しており、学生自身も「書生」という意識がまだ強かったであろうことから、今日的な学生イメージで捉えることはできない。また、運動の組織的継続性を学生運動の重要な指標の一つと考えるならば、この有志大運動会は一過的なものにすぎなかった。やはり、これを日本における学生運動の嚆矢と位置づけるのは無理がある。

その意味で、私が注目しているのは、足尾鉍毒問題に取り組んだ学生たちの運動である。

一九〇四（明治三七）年二月一日、田中正造は天皇への直訴を敢行したが、この事件を契機に鉍毒問題に関する世論が再び盛り上がった。そして、様々なかたちで鉍毒被害民の救済運動が展開されていったが、直訴後の運動がそれ以前の運動と決定的に異なるのは、それが全国的な広がりを持つようになったことと、学生たちが大挙して足尾鉍毒反対運動に立ち上がったことであった。それまでは、一九〇〇年七月に結成された鉍毒調査有志会のように、基本的に在京知識人中心の運動であったといえるからである。学生たちの運動は、菊川がいうような「階級的自覚」にもとづいたものではなかったにせよ、人道（ヒューマニズム）や正義感を土台にし、資本主義の矛盾の表現であった社会問題に学生たちが独自に取り組んだ最初の事例であったと位置づけることが可能である。<sup>1)</sup>

そこで、本論では、まず、日清戦後の社会状況の中に当時の若者たちの精神的位相を見定め、ついで社会問題に注目する若者たちの中から足尾鉍毒問題に取り組む学生が出現するさまをおさえ、彼らの運動の概要をたどり、最後に、熊本出身の学生で足尾鉍毒問題に取り組んだ人々についてふれることにする。

まず、当時の若者たちを取り巻く時代の雰囲気がどのようなものであったか、おさえてみよう。

日清戦後の日本社会は、戦争と軍備拡張を通じた国家の肥大化、資本主義発展に伴う社会問題の激化などによって特徴づけられる。それは、一面では、「金権社会」「腐敗社会」「賄賂政治」などという形をとって表面化した。たとえば、一八九八（明治三二）年暮れに明らかになった地租増徴にともなう反対派議員切り崩しのための賄賂工作、一九〇〇年一月の東京市会汚職事件（一九〇一年六月二日には、それらの賄賂・汚職事件の首魁と目された星亨が暗殺されている）、そして極めつけは一九〇二年二月の教科書疑獄事件など、あげていけばきりがない。

そういった状況の中で、若者たちは、国家や家父長制の重圧などによる閉塞感を抱きつつ、あいつぐ腐敗事件に正義感をたぎらせ、しかしながら、かつての自由民権思想やキリスト教、のちのデモクラシーやマルクス主義などのような確固とした思想的よりどころを見いだせないまま、徴兵や肺結核などによる「死」の恐怖とも向き合いながら生きざるをえなかった。その結果、私が見るところ、おおよそ四つの類型の若者群像が登場してきたといえる。<sup>5)</sup>

第一に、「近代」に対する怨念を膨らませ、「破壊」「第二の革命」を声高に叫ぶ若者たちであり、田岡燾雲（一八七〇—一九二二）などに代表させることができる。田岡が一八九七年一月に脱稿した「青年の意気」という文章の中には、「破壊」や「革命」という言葉が踊っている。「青年は破壊的なり、革命的なり」、「唯破壊せよ、革命せよ。破壊し革命すれば爾が事畢る」、「起てよ青年、起て革命の健児たれよ」。田岡によれば、「破壊」と「革命」は「青年の天職」であるという。<sup>6)</sup> 全体のトーンを、一〇年前に出版された徳富蘇峰の「新日本之青年」と比較してみると、その相違がよくわかる。同じく「青年」を扱っていても、蘇峰の著作の中の「青年」は「進取」の象徴であり、平民的「近代」を謳歌すべき存在であったのに対して、田岡の「青年」はまさに「絶望」の象徴であり、近代文明を否定する反近代主義的色彩が濃厚である。

## 足尾鉉毒問題と学生運動（小松）

このような反近代主義的な青年たちは、「破壊」を叫ぶに急な余り、往々にして自ら展望を閉ざしてしまふことが多かった。

第二には、「成功」「立身出世」に取りつかれた若者たちの存在が指摘できる。「労働世界」第六年第一六号（一九〇二年九月二三日）に、某博士の「正直と成功」と題する小文が掲載されているが、そこには、「近頃青年の間にコヲ云ふ語が流行して居る。／此の社会では正直者はドラしても成功せぬから、先づ思ひ切つて悪でも何でもやり成功して後に済まし込むのが上分別ぢや、アノ人もソヲぢやない乎、コノ人もソヲぢやない乎」と、その姿が描かれていた。また、その名もずばりといふべき雑誌「成功」が、成功雑誌社から一九〇二年一〇月一〇日に創刊され、その表紙には「立志独立 成功之友」と銘うたれていた。そして、毎号、「成功の秘訣」と題する各界名士の話をズラリ並べている。この「成功」という雑誌は、「世界之日本」（一八九六年七月創刊）と並んで、日清戦後の社会風潮や思想傾向をある面で象徴するものであった。

第三には、社会矛盾には背を向けて、個人的な問題に「煩悶」する若者たちがあげられる。日清日露の戦間期は、「矛盾煩悶の時代」（高山樗牛）、「思想惑乱の時代」（後藤宙外）、「彷徨と懐疑の時代」等、様々に形容された時期であった。「煩悶」という言葉が流行した時代である。より多くの場合、恋愛を契機とした「生きる意味」の模索が、「煩悶」や「懐疑」に若者たちをおもむかせたのであった。その代表格は、一九〇三年五月二二日に、日光華嚴の滝に投身自殺した一高生藤村操であったといえる。有名な話であるが、藤村は、滝壺に身を投げる前に、松の幹を削り、そこに「巖頭之感」を書き残した。「ホレーシヨの哲学竟に何等のオーソリチーを値するものぞ、万有の真相は唯一言にして悉す、曰く「不可解」、我この恨を懐いて煩悶遂に死を決す。．．．」という「遺書」は、多くの若者の心をゆさぶり、藤村の後追い自殺が増え、「人生、不可解なり」が流行語になった。<sup>17</sup>このような、国家社会に背を向け、自己一身の事柄にしか関心を寄せない第二・第三類型の若者たちは、日露戦後にさらに増えていくことになる。

そして、第四は、正義感を燃えたぎらせ社会矛盾と格闘した若者たちで、その多くは、社会変革の道筋を社会主義思想に求めていった。第一類型と重なり合う部分も多いが、自己破滅的ではなく、社会運動の実践を通して社会の変革を追求していった点で大きく異なっている。足尾鉍毒問題で、被害民救済のために熱心に活動した若者たちは、この第四類型に位置づけることができる。

## 二 学生の足尾鉍毒救済運動

学生が足尾鉍毒問題でたちあがったのは、田中正造の直訴の衝撃もさることながら、鉍毒地救済婦人会が、冬季休暇中の学生たちの運動を提唱したのが契機であったといわれている。その運動の内容は、鉍毒被害地の大挙視察（現地見学）と演説会・義捐金募集の二つに分けられる。運動の中心を担ったのは、第一回大挙視察後に結成された「学生鉍毒救済会」であった。

第一回学生鉍毒地大挙視察は、一九〇一（明治三四）年二月二十七日に実施された。いま、その模様を、「万朝報」の記事に見てみたい。

鉍毒被害地大挙視察一行　ハ予報の通り昨日午前六時上野を發し九時過古河に着し七百余名靡々として谷中村及び海老瀬村に進み懇に被害の状態を視察し午後五時又古河より乗車して帰京したり、安部磯雄、木下尚江、岩本善治、内村鑑三等も同行したり、視察中種々愉快なる事共ありたれど委くハ明日の紙上に記さん（一九〇一年二月二八日）

### 鉍毒被害地大挙視察

▲昨廿七日鉍毒調査青年同志会の発起になれる学生大挙視察の事あり、予と岡秋岳の両名も特派せられて一行に加はり足尾鉍毒問題と学生運動（小松）

足尾鉍毒問題と学生運動（小松）

ぬ

▲上野停車場 に集りたる学生ハ無慮七百余名にして、学籍は帝国大学、専門学校、慶応義塾、明治法律学校、東京法学院、高等商業学校、高等師範学校、東京音楽学校等なり、婦人と外国人の二二人交りたるハ特に人の目を牽きたり、午前六時卅五分を以て出発す

▲汽車中 ハ此大勢に似ず、可憐の被害民を訪はんとの精神なれば案外におとなしく鉍毒地訪問の歌を謡いて（中にハ手月琴を引くもあり）て九時頃古河停車場に着しぬ

▲古河停車場 にハ此一行を迎へんとて集りたる被害民無慮数百名あり、安部磯雄の演説ありて後、千余の同勢數十旗の旗押立て一里に跨る行列を以て進みたる壯観、被害民に取てハ定めし数万の援兵を得たるの感ありしならん

▲栃木県下都賀郡谷中村 の広漠たる荒野ハ先づ一行の眼前に現はれたり、予ハ一々此に被害の状況を記すの暇なし、只枯れかかりたる桑、引抜かれたる竹、廢屋の跡、無住の寺、総て被害の激甚を証明して余ある事を記しておくのみ、然るに此沙漠同様なる被害地の中央に

▲宏壮なる白亜の邸宅 あり、此邸宅に住せるハ谷中村の元の村長にして、其頃古河市兵衛の犬となりて賄賂を食ひ、村民の窮状を冷眼に見ながら己れ独り裕なる暮しをなし居る古沢繁治と云ふ者なり、一行千余人ハ此邸宅の前にて

▲「獸面獸心古沢繁治大賊」 と大呼絶叫して此利口なる人の徳を賛嘆したり、近頃愉快の事共なり、それより

▲群馬県邑楽郡海老瀬村 に至り、此にて又茫茫たる荒野の悲惨を視察して後、海老瀬小学校にて安部、加藤（咄堂）、木下、内村、田村（直臣）等の演説あり、それより再び谷中村を経て哀れる人々の住居を訪ひ午後五時頃古河停車場に着したり、そこにて又荷車を演壇にして

▲暗がりの中に演説 ありて後、（専門学校生山川某が病気に罹りたる外）一行無事帰京の途に就きたり、上野に着せしハ九時五十分なりき、近來未曾有の修学旅行と云ふべし（祿堂生）（同年二月二九日）

この大挙視察旅行に参加した学生生徒の数は、「毎日新聞」の報道やそれに依拠した菊地茂の資料では「千百余名」となっており、「万朝報」の「七百余名」とはかなりの開きがあるが、その理由の一端は、「万朝報」が上野駅に集合した学生数を掲出しているのに対し、「毎日新聞」は、大宮駅など、途中駅から続々乗り込んできた学生も合算していることに求められよう。それにしても、大変な数の学生である。諸新聞報道などから、学生が参加したことが確実な学校名は、東京帝国大学・学習院・明治法律学校・東京専門学校・慶應義塾・法学院・明治学院・哲学館・高等商業学校・高等師範学校・東京音楽学校・曹洞宗大学林・日蓮宗大学林・早稲田実業学校・正則英語学校・国民英学会・開成中学・麻布中学・京北中学・立教中学などであった。当時、早稲田実業に在籍していた竹久夢二、東京帝国大学の学生であった河上肇なども参加している。

監督委員として、東京専門学校<sup>(10)</sup>の安部磯雄らが同行した。委員長はキリスト者の田村直臣がつとめたようである。「毎日新聞」の記者であった木下尚江は、説明委員という肩書きで同行している。衆目を集めた婦人とは、「毎日新聞」の松本英子記者と一人の女学生で、外国人とは、シカゴ・トリビューン通信員の「クレメント」という人物であった。

帰京した学生たちは、さっそく、翌三〇日に、神田青年会館で「鉋毒被害地学生大挙視察報告演説会」を開催した。田村直臣の開会の辞に続き、東京帝国大学学生布施源之助、東京専門学校学生内田益三、慶應義塾学生竹内恒吉、明治法律学校学生大亦楠太郎、立教中学学生前田多門などが演説し、その後、木下や安部、内村、巖本らが演説している。この日、「学生鉋毒救済会」が結成され、大亦が提唱した鉋毒被害民救済のための路傍演説の実施が承認された。

路傍演説は、翌年一月一日から開始された。義捐金取扱事務局は毎日新聞社に置かれた。路傍演説の模様は、菊地の資料中に紹介されている「中西堅助君病床日誌」に詳しい。まさに雪まじりの寒風吹きすさぶ中、パンをかじりながらの、「正義の爲め」の行動であり、絶叫であった。

## 足尾鉍毒問題と学生運動（小松）

二日には、早くも、警官の妨害が入った。「警視庁より此演説は絶対に禁止せよとの命令ありたり、故に厳禁す」というのである。大亦が警視庁に「談判」に行ったところ、「警視庁にては道路の妨害にならざる限り決して止めざるの方針」であることがわかり、虚言をもつて妨害した警官を免職させよと息巻きながら、三日より路傍演説を再開した。ところが、文部省と府知事の圧力が学校長や理事等に加わり、中西が在籍していた明治法律学校では、七日に学校長名による次のような禁止令が出された。

「足尾鉍毒問題にして近來学生にして之が視察に従事し或は義捐金募集路傍演説を為す者有之候處右は政治に關係し學生にして甚だ穩ならざる義に付可差止旨東京府知事より嚴達有之候條爾今右等の行為一切無之様注意可有之此旨特に揭示候也」<sup>(12)</sup>

おそらく、他の学校でも同様の禁止令が出されたものと考えられる。

当時、学生は、一九〇〇年三月一〇日に制定された治安警察法により、その第五条第四項において「官立公立私立学校ノ教員学生生徒」は政治結社に加入することが禁止され、また、「女子及未成年者ハ公衆ヲ会同スル政談集會ニ会同シ若ハ其ノ發起人タルコトヲ得ス」という但書によって、政治に関する演説会の発起や参加まで規制されていた。もつとも、この但書に該当する学生は未成年者に限られていたが、総体的に学生の政治運動は大きく制限されていたといつてよい。だから、この路傍演説禁止令の背後には、法的根拠として治安警察法第五条が存在していたと推測できる。

中西は、義捐金の募集は「單純なる慈善事業」であり政治に關係するものではない、自分たちの行為は「学生の本分を守りたる者」として「賞賛」に値こそすれ、三〇万の被害民の前に「我は学生なりとし袖手傍觀なす者あらば」、むしろそういった学生の方が血も涙もない輩として責められるべきである、と憤然としながら、それでも、様々な会場を借りての演説会を止めることはなかった。

そして、学生鉍毒救済会は、一月二六日に、第二回学生鉍毒地大挙視察の実施を企画した。これに対しても、政府は、



前日の夜一〇時半に、菊池大麓文部大臣から山川健次郎大学総長に宛てた禁止令を發し、彈圧してきた。それにもかかわらず、二五〇余名もの学生が参加したのである。そして、夕方六時半に上野駅に帰着したあと、大亦たちは、さっそく、上野公園の入口で路傍演説を試みている。<sup>13)</sup>

このような運動の過程で、三月二四日、学生鉅毒救済会の中心メンバーの一人であり、病弱な身体をおして、嚴冬のさなかに路傍演説を繰り返していた中西堅助が、死去した。まさに「憤死」であった。中西は、一八八四年秋田県横手生まれで、まだ一九才の若さであった。四月六日に、田中弘之宅で追弔会が催され、足尾鉅毒被害民総代として田中正造が「弔辭」を述べている。<sup>14)</sup>

学生鉅毒救済会は、五月四日に解散し、新たに青年修養会を設立した。その中心になったのは、菊池茂と大亦楠太郎などであった。創立の趣旨には、「意義は一言にして盡く、曰く現下の青年は嘔吐に耐へたらずやと、苟くも現状に慨する者あらば、皆な来れ、来つて吾人と共に品性の修養を謀れ」とあり、会則の第二条には、「本会は各自の品性を修養し、正義人道を以て進路とす」と掲げられてあつた。<sup>15)</sup>

青年修養会は、七月一日から七日まで連続して、更に翌一九〇三(明治三六)年一〇月一四日から、一六、一八、二二、二五、二六、二七、十一月一日、一一、一四日と、一〇回にわたつて、「足尾銅山鉅業停止意見発表演説会」を開いて、熱心に活動した。また、その後も運動を継続し、一九〇五年二月七日には、谷中村買収反対大演説会を神田青年会館で開き、「栃木県谷中村買収反対意見書」を配布している。

青年修養会の解散日時は、菊池の資料によつても不明だが、正造の梅澤初子宛書簡(一九〇五年一〇月二四日付)には、「青年修養会ハ其頃より解散同然」(⑩四四九)と出てくるので、一九〇五年秋頃にはすでに自然解消状態にあつたものと推測できる。

足尾鉍毒問題と学生運動（小松）

三 足尾鉍毒問題に取り組んだ熊本出身の学生

以上のように、学生鉍毒救済会や青年修養会を中心とする学生の鉍毒救済運動は、たくさんの学生が長期間にわたって組織的に取り組んだ点に意義を見出すことができる。菊川がいう「学生社会運動」の広義の定義を採用すれば、日本における学生社会運動の嚆矢であったと位置づけることが、十分に可能であろう。そんな中で、熊本県出身の学生で鉍毒問題に取り組んだ人は存在したのであろうか。

その代表として、今日もつとも有名なのは、荒村Ⅱ松岡悟であろう。

一八七九年に熊本県八代に生まれた松岡は、同志社高等学部文科学校に在籍していたときに、田中正造の直訴事件を知り、非常な感動を受けて、京都からわざわざ渡良瀬川沿岸の被害地を訪ねている。そして、京都の洛陽教会を拠点にして、一九〇二年一月一七日から鉍毒被害民救済義捐金募集運動を実施したり、一月二十五日、二月七日、一日と鉍毒問題演説会を開催したりして、阪神地方での鉍毒問題の世論喚起に中心的な力を發揮した。

松岡は、一月二五日に開催された演説会で、「噫狂人田中正造翁」と題して演説しているが、それを文章化したものと考えられる「足尾鉍毒問題」(「噫狂人田中正造翁」という副題がついている)では、まず、足尾鉍毒問題の歴史を概述し、被害民への熱き同情をもって、「人権よりは金権の重ぜらる、明治の御代」を痛烈に告発している。そして、田中正造を次のように評している。

昔は佐倉の義民、哀を將軍に直訴して磔殺せられ、今日憲法明らかなるの時此人聖駕を日比谷に要す、帝国歴史あつてより以来、稀有の珍事を歴史に加ふ、暗黒！暗黒！豈文明の大怪事にあらずとせんや。

然れども之れまた止むを得ざるなり、翁は事の到底尋常の手段に行はれざるを知るや、こゝに愈々一身を聖駕の下に

擲うつて、而して同胞四十萬の窮状を哀奏せんとしたるなり、其草莽の微臣田中正造恐惶々々頓首々々に筆を起こして親しく蒼生の慘状を訴え奉り、泣いて救済の憐れみを乞ひ、末段筆を改めて、臣年己に六十を越へて、餘年又幾何もなかるらむと哀奏するを読まば、誰れか其誠忠に慟哭せざるものあらむや。

而かも聴け、冷淡なる社会の反響を、健康診断、精神錯乱、更に云ふ狂人田中正造嗚呼狂人、其名何んぞいまわしくしてなつかしきよ、徒らに治国平天下を謳歌して、観樂(カク)に眠れる社会を破壊す可く、世には数十の狂人を要す、世挙げて皆濁れり、我独り清めり、衆人皆醉へり我独り醒めたり、是れによりて遂に放たれ、ペキラの海底に大浄界を求めたる屈原の如きも狂人なり、旧約は狂人が歴史にして新約は大狂人イエスの歴史なり、而してかれは狂人中の大狂人たりしことを記せよ、然らばこ、に我田中正造氏の如きは、其窮命落魄荒原に毒殺せられつ、ある我同胞の爲め狂せりと云はむも、敢て何の恥ずるところぞ、(下略)<sup>(16)</sup>

このように、松岡は、直訴せざるをえなかつた正造の心情を理解しようといつとめ、世論が正造を「狂人」扱いするのを逆手に取り、歴史上偉大な人物は皆「狂人」「狂児」であつて、腐敗しきつた現社会を「破壊」するには、正造のような「狂人」が数十人必要であると強調している。注目しなければならぬのは、自らを「狂い蝶」とする認識が、その前提に存在していたことである。厚い茨に遮られた白百合をめぐり、か弱い羽しか持たぬ身であることも忘れ、果敢に突っ込んでいく「狂い蝶」。歴史を通じていえることだが、若者は、時代との違和感や権力への反抗心を、「狂」という文字に託し、自らをそのように規定しがちであつた。松岡もその一人であり、そうした自分に引きつけて正造を理解しようといふ心があったのである。

松岡のように、鉾毒問題との出会いによつて、その人生が決定づけられたケースを、私たちはたくさん拾い出すことができる。<sup>(17)</sup>松岡は、その後、濃飛育児院において貧孤児救済活動に携わり、早稲田大学高等予科に進学してからは、早稲田

足尾鉍毒問題と学生運動（小松）

社会学会の一員として人力車夫問題や労働問題に取り組みなどの社会活動を続けた。まさに、「持たざる者」の視点から、貧富の差や富貴支配の社会の「破壊」を待望し、社会主義思想に接近していき、「愛と平和と平等」の「新しき世」の実現を希求していったのである。しかし、一九〇四年七月二三日、肺結核のために、松岡は二五才の短い人生を閉じることになった。

このように、足尾鉍毒問題に取り組んだ熊本県出身の学生の中で、松岡はもつとも有名ではあるが、その名を「田中正造全集」のなかに見いだすことはできない。田中正造が残した資料中に一番多く登場する学生の名は、佐藤千纏と高木来喜の二人である。二人とも早稲田大学（一九〇二年九月に東京専門学校を改称）の学生で、佐藤は大分県宇佐町の出身、高木は熊本県熊本市の出身であるが、足尾鉍毒問題の研究者にもほとんど知られていない無名の存在である。

ここで、高木の名が登場する箇所を、「田中正造全集」から拾い出してみる。

- 一九〇三年一月 「……高木来喜」(⑩二九五)
- 一九〇三年六月 「鶴巻町鶴巻館 高木来喜」(⑩四四三)
- 一九〇三年一〇月二二日 「○高木来喜氏、被害民ノ恩人ナリ。熊本人鶴巻館。」(⑩五三九)
- 一九〇三年二月 「佐藤千纏 高木来喜 岡本金一郎」(同前)

このほか、直接高木の名は出てこないが、おそらく高木のことをさしているであろうと推測される内容の書簡がある。

九州大分県の学生、牛込早稲田大学生ニして佐藤千纏氏ハ、去年春二人の同志を誘へ（一人ハ熊本、一人ハ長野）東京表て運動妨害ありしたため、さけて京都市二行きてげん燈会を催し物品を集め、又妨害せられ、大阪市同断、神戸、姫路、

彦根の諸市二同断、又横浜、横須賀、丹波の三田、武州板橋同断、福島市、仙台市、岩手市、青森市二同断、銅山二一度、被害地二回、此分の各県各地を奔走して物品を集めたり。

其仙台、岩手、青森ニハ正造も同行せしなり。(一九〇三年一月四日付、蓼沼丈吉宛、⑬七六)

このとき佐藤と行動をとにした「熊本」の学生が高木であるならば、実に、東北から関西までの広範囲にわたって救済活動を展開していたことになる。このように、「被害民ノ恩人」とまで正造にいわしめた高木来喜とは、一体、どのような人物であったのだろうか。非常に興味深いところであり、現在追跡調査中であるが、その経歴にはまだ不明な点が多い。遺憾ではあるが、以下は、中間報告の域を出ていないことをご了承いただきたい。

【第十八回早稲田大学校友會誌<sup>18</sup>】によれば、高木の本籍は「熊本市小澤町一一七」(現在、本籍地に高木姓の家は見あたらぬ)となっており、早稲田大学邦語政治科を、一九〇三年七月に「得業」(卒業)したことになる(佐藤も同時に卒業)。

早稲田に在学中、高木は、内田や佐藤らとともに、早稲田鉅毒研究会を組織し、学生鉅毒救済会など、鉅毒問題の取り組みで中心的な役割を果たしている。また、青年修養会や早稲田大学雄弁会を設立し、その中心メンバーとして活躍するなど、早稲田の学生社会運動の中で、高木の存在はかなり大きなものであったと推測できる。

また、青年修養会が主催した一九〇二年七月一日からの連続演説会で、高木は、第一回、四回、七回と三度登壇している。演題は、それぞれ、「民は國の本、吏は民の雇」、「輿論の勢力」、「悪政の真価果して幾干ぞ」であった。

だが、学生運動の一般的な傾向として、大学在学中は運動に熱心にかかわっても、卒業と同時にそれから離れていく人も多い。高木が大学を卒業した一九〇三年の一〇月一四日から、先にも触れたように、「足尾銅山鉅業停止意見発表演説会」を青年修養会が主催しているが、この演説会の弁士の中に高木の名を見いだすことはできない。大亦楠太郎や佐藤千

足尾鉍毒問題と学生運動（小松）

繼、永井柳太郎らが登壇しているにもかかわらず、である。田中正造の資料には、一九〇三年一二月まで高木の名が登場しているが、おそらく、高木は、大学卒業とほぼ同時に、足尾鉍毒救済運動の第一線から手を引いてしまった可能性が高い。

その後の経歴については、極めて断片的なことしかわかっていない。

まず、一九〇八年七月に、「静岡民友新聞」に入社していることが、一九〇八年七月二二日号に掲載された高木の「入社辞」から判明する。<sup>20)</sup> それによれば、「静岡民友新聞」に入社する前は、「静岡朝報」に関係していたようである。

「静岡民友新聞」は、改進黨系の新聞として、一八九一年一〇月二〇日に創刊された新聞であるが、「静岡朝報」はそこからわかれて一九〇七年九月七日に刊行されたものである。

その後、高木は、一九一〇年に「茶業の友」（四月より「茶業界」と改称、静岡県茶業組合聯合会議所発行）の主筆に就任する。そして、五月一日には、高木が主唱して設立した茶業青年会の発会式が行われ、高木は、その席で趣意書を朗読している。また、茶業青年会の大会が一九一二年三月一日に開催され、高木は、七名の幹事の内の一人に選ばれている。しかし、「本会は前茶業界主筆高木来喜氏の主唱に係りしを以て、大正二年同氏の本所を去ると共に解散の姿となれり」という。<sup>21)</sup>

一九一一年には、静岡県茶業組合聯合会議所より派遣されて、国民新聞・京城日報主催の朝鮮実業視察団に参加している。この派遣は、静岡県茶業組合聯合会議所が、一九〇九年頃より注目し、かつ努力してきた、朝鮮への販路拡大政策の一環であったろう。高木は、朝鮮に、静岡県の茶を普及させるためには、「無代配布を行ふこと、茶の効能を著しく記したる注目し易く印象深からしむる広告を配布すること、信用ある小売店を適当に利用すること」などの意見を開陳していたという。<sup>22)</sup>

一九一二年一二月調査による「早稲田大学校友會會員名簿」によれば、高木は、「静岡市東鷹匠町一一 貿易商」とし

て登場する。「茶業界」の主筆としてかわるだけでなく、自分も実際に茶の輸出業に携わっていたのであろうか。そして、朝鮮への茶の売り込みを行っていたのだろうか。そうとでも考えない限り、「貿易商」と自称することはできないはずである。

ところが、「静岡県茶業史」によれば、翌一九一三年一月には「茶業界」の主筆を辞任し、同時に静岡県茶業組合聯合会議所も離れた、と記されている。どうも、高木は、操觚の志を捨てることができなかつたらしい。春山俊夫氏の調査によつて、一月一日に創刊された「静岡新聞」の主幹に就任していることが判明する。<sup>(23)</sup>

しかし、その後の高木の足取りは、ようとしてつかめない。当然、高木自身の資料を探す手がかりもつかめないままであった。ところが、熊本近代史研究会の上田稷一氏に、大逆事件に連座した新美卯一郎宛の高木の書簡を紹介していただいたのである。大逆事件で処刑された熊本県関係者は、新美卯一郎と松尾卯一太の二名であるが、書簡の日付は、明治四三年四月二十六日であり、新美が起訴・拘留される三ヶ月余り前のことになる。書簡は、大審院の証拠物の中にあつたもので、他の人物によつて筆写されたものである。新美ら「熊本評論」関係者は、当時社会主義者の一網打尽を狙っていた官憲の監視の下に置かれており、書簡等もすべて検閲されていた可能性が高い。

その書簡には、新美が、静岡民友新聞社宛に書簡を送つたので落手が遅れたこと、大学を卒業後は「東京横浜と経めぐり静岡朝報に主筆とな」つたこと、そして現在は「茶業界」の主筆をしているが、それは「手なぐさみ」にすぎないこと、などが記されている。<sup>(24)</sup>

文面から、高木と新美の間には、友人関係ともいふべき交流があつたことがうかがい知れるが、それがいつからのことなのかは分からない。新美は、濟々發に在籍したことがあるので、もしかして高木も同級生かと思つて、濟々發の「同窓会員名簿」等を調査してみたが、高木の名は出てこなかつた。むしろ、早稲田専門学校で二人が知り合つた可能性がたかい。それは、熊本地裁における武富検事の取調に対し、新美が、「早稲田専門学校校政治科に入学していたが明治三三年故

## 足尾鉍毒問題と学生運動（小松）

郷の家が流されたため一時帰郷したと陳述しており、高木とはほぼ同時期に同じ学科に在籍していたらしいことがわかるからである。<sup>25</sup>

以上のように、足尾鉍毒問題にかかわった熊本県出身学生の代表的存在である高木来喜について述べてきたが、判明したことは、ごく一部分に過ぎない。早稲田に入学するまでと、卒業直後、それに静岡に移り住んでから「静岡新聞」の主幹となった後の足取りは、まったく不明である。新聞関係者の事典として定評がある「明治新聞雑誌関係者略伝」（宮武外骨・西田長寿、みすず書房、一九八五年）にも、高木は出てこない。

## おわりに

以上、本稿では、日清戦後社会の時代精神状況の中に足尾鉍毒救済運動に取り組んだ学生たちを位置づけ、その運動が、日本における「学生社会運動」の嚆矢であったことを論証した。それでは、狭義の「学生運動」という評価は可能であろうか。

足尾鉍毒救済運動に携わった学生たちの意識は、中西に代表されるように、基本的には、人道主義に根ざす慈善活動であるという捉え方であった。その意味では、政治的なものということはできない。しかしながら、田中正造を中心とする足尾鉍毒反対運動の銚先は、つねに一貫して政府に向けられていたのであり、彼らが足尾銅山の操業停止を要求したことは、古河Ⅱ大資本擁護の姿勢を崩さない政府の方針に真向から対立するものであったといえる。

このように足尾鉍毒反対運動の性格をおさえるならば、青年修養会が、足尾銅山の操業停止を明確に打ち出した演説会を開催していることは、注目に値する。ただでさえ、学生たちの「人道」を謳い「理想」を追求する行動は、最終的に政治批判の一線を越えさせてやまないものである。階級的意識をもって明確に「反権力」をスローガンに掲げた運動ではなかったが、彼らは、鉍毒被害民の立場から古河を擁護する政府を明確に批判していたのである。そして、それにかわる政



治を希求していたのである。

たしかに、彼らの運動は、一九二〇年代のマルクス主義の影響下にあった学生運動のような体制変革のビジョンを持ち合わせてはいなかった。しかし、そのことにこだわるかぎり、日本の学生運動の歴史は、学生たちがマルクス主義を受け入れたときから説き起こされねばならなくなる。明治時代には、「学生運動」は存在しなかった、ということになってしまふ。様々な学校を横断的に組織した運動の母体があり、少なくとも四年近くは継続し、政府批判の色彩を徐々に強めていった学生たちの足尾鉍毒救済運動に、日本における「学生運動」の起点であるという名替を与えたいのは、はたして私だけであろうか。

なお、高木来喜など、運動に参加した個々の学生の追跡調査は、今後の課題としたい。本稿の「三」のように、学生を中心とする熊本県出身者・関係者と足尾鉍毒事件とのかわりを掘り起こす作業は、私たちと水俣病（環境公害問題）とのかかわりを再考するために歴史学が寄与することができる一つの重要な方法であると、私は信じてやまない。

#### 注

- (1) たとえば、岡本宏編「一九六八年」時代転換の起点（法律文化社、一九九五年）、など。
- (2) 単行本では、中村新太郎「日本学生運動の歴史」（白石書店、一九七六年）などがあるが、この本も、大正デモクラシー以降の戦前の学生運動の歴史をまとめたものである。明治期については、「プロローグ 明治期の学生像」でごく簡単に触れている程度であり、本稿が対象としている学生たちの足尾鉍毒救済運動に関しても、河上肇と志賀直哉のエピソード（学習院中等科に在籍していた志賀は、学生鉍毒地大署視察に参加しようとして、父親と激しく対立した。河上に関しては後述する）を紹介するにとどまり、「運動」としての位置づけはなされていない。
- (3) この菊川の著作の「序説」として、「学生運動史の前奏曲を略述」したのが、吉野作造の「日本学生運動史」であった（岩波講座「教育科学」第一五巻所収、一九三二年）。のち、「吉野作造選集」第一〇巻所収、岩波書店、一九九五年）。吉野も菊川と同様に、「学生運動」の起点を東大新入会の設立に求めている。しかしながら、「前奏曲」と自ら位置づけているにもかかわらず、第一次世界大戦前の「学生運動」にはほとんどふれず、その内容は、大学と学生の歴史を概述したにとどまっている。

足尾鉍毒問題と学生運動（小松）

(4) 秘密に言えば、「学生運動」と「学生社会運動」とは区別すべきであらう。「学生運動」は、戦前、戦後を通して、ずっと日本の左翼運動や政治運動の代名詞となってきた。社会の一つの大きな「層」としての学生が、集团的・組織的に行動する「学生運動」が、反体制・反権力闘争の先端を担ってきたのである」とは、高木正幸「全学連と全共闘」（講談社、一九八五年）の「はじめに」の一節であるが、ここに戦後日本における「学生運動」の一般的イメージが、余すところなく表現されている。つまり、「学生運動」とは、「学生」「反体制」「反権力」をスローガンに掲げて行う政治運動ないしは闘争のことであり、「学生運動」を定義すれば、「学生社会運動」は、もう少し幅広い概念、たとえば、阪神・淡路大震災時の学生ボランティアなども含めることのできるものとして考えられる。もちろん、両者には重なり合う部分が大いし、「学生運動」を「学生社会運動」に包括して、そのもつとも狭義の意味と考へることも可能である。

(5) かつて岡義武は、「日露戦後における新しい世代の成長」（上下、「思想」第五二二、三三三号、一九六七年二、三月。のち、「岡義武著作集」第三巻所収、岩波書店、一九九二年）と題する論文で、その特徴を、①「成功」という言葉の流行、②享乐的傾向の増大、③懷疑、煩悶の流行、④個人主義思想の広範化、の四つにまとめていた。しかし、このような傾向は、多かれ少なかれ、日清戦後社会に登場しはじめるものであることを、ここでは強調しておきたい。

(6) 「嶺雲挿史」一八九九年二月、明治文学全集「明治社会主義文学集（二）」所収。ちなみに、「嶺雲挿史」は二万部売れたといわれている。

(7) のちに、藤村は、プラトニッククラブの相手であった馬島千代に、自殺の直前に、書き込みを入れた高山樗牛の「滝口入道」を手渡していたことがわかり、自殺の直接的な原因は、哲学的なものというよりも失恋ではなかったか、とする説が有力になってきた。（「朝日新聞」一九八六年七月二日）

(8) 菊地茂「学生の鉍毒救済運動」（斉藤英子編「菊地茂著作集」第一巻所収、早稲田大学出版部、一九七七年）参照。菊地茂のこの一文は、一九二五年五月にまとめられたもので、当時東京専門学校（早稲田大学）の学生として実際に鉍毒救済運動に携わった者の記録として、価値がある。また、斉藤英子による「解題」も大変参考になる。

(9) 学生の内訳は、「早稲田専門学校生徒」二百八十五名、同中学生五十二名、大学生九十八名、高等中学生百十名、尋常中学生五十六名、小石川白山道場天地古鑑氏の一隊三十名、毎日新聞木下尚江氏等の一隊四百十八名」などであった。（菊地、二七八頁）

(10) 一九〇一年二月二〇日に東京中央公会堂で開かれた鉍毒救済婦人会（潮田千勢子会長）主催の演説会を聞いた河上登が、義捐金募集の呼びかけに対して、持ち合わせがなかったために、羽織と外套、それに襟巻を差しだし、翌朝、身に付けているもの以外の衣類を行李につめ、人力車夫に頼んで婦人会に送り届けたというエピソードは、とても有名である。田中正造の書簡に、「此洋服ハ大学生某の寄進せるものにて候間、決て不正品ニハ無之、出所正しきものニ候。御婦人の鉍毒救済会より貴君ニ拝呈仕度、（中略）此品の歴史ハ実ニ精神的潔白男子の着用せしものニ候」とあるのは、もしかしたら、河上の衣類のことをさしているのかもしれない（一九〇二年一月六日付、内田太市宛、「田中正造全集」第一五巻、三八三―四頁、岩波書店。以下、「田中正造全集」からの引用に際しては、⑬三八

- 三一四、などのように略記する)。もつとも、学生たちが着ていたものを寄付する光景は、京都などあちこちの演説会で見られたという。
- (11) 『菊地茂著作集』第一巻、二九一―二頁。
- (12) 同前、三〇三頁。
- (13) 同前、三二五頁。
- (14) 正造は、四月二日付けの野口春蔵他宛書簡で、次のように述べている。「○東京の諸団体中学生の中西氏死去二付、来ル六日大弔祭会。○二人大学ヲ退学セシメラレタルアリ。雲龍寺の演舌の事なりと云ふ。真正の学生ハ或ハ死シ、或ハ退校セシメラル。此問題ノタメニ身ヲ犠牲ニセラレタルモノナリ。」(四一六)
- (15) 『菊地茂著作集』第一巻、三四六頁。なお、青年修養会に見られるような動きは、一九〇一年七月二〇日に『万朝報』の黒岩涙香らを中心に結成された理想団などと関連しているものと判断でき、金権腐敗社会に対する一つのアンチテーゼであった。
- (16) 天野茂編『荒村遺稿』不二出版(復刻版)、一九八二年、二九五―六頁。
- (17) そのなかでも、代表的な人物は、黒澤西蔵であろう。黒澤は、一八八五年、茨城県に貧農の子俸として生まれた。一八九九年六月、一四才で上京し、牛込喜久井町の松本小七郎という数学者の家に書生として住み込み、正則英語学校に通つたりして、海軍大尉になることを夢見ていた。いわば、彼も、彼も、ご多分にもれず「立身出世」イデオロギーの虜であったといえる。ところが、海軍兵学校を受験したところ、体格検査ではねられ、翌年も一度受験しようと思つていたときに直訴事件が起きたのである。直訴の新聞報道を読んで非常に感動した黒澤は、芝口越中屋までわざわざ正造を訪ねていった。そして、学生大挙視察団の一行に参加し、友人と二人で五日間、筆舌に尽くしがたい鉅毒被害地の惨状を目の当たりにし、被害民の救済運動に挺身することを決意した。学生鉅毒救済会の路傍演説にも参加した。学校もやめ、以降、一九〇五年七月まで正造とともに奔走した。その間、「浮浪罪」や「家宅侵入罪」などでたびたび拘留・起訴されたが、黒澤を突き動かしていたのは、まさに「義憤」であり、自ら被害民の啓蒙と自立的運動への火付け役を任じて運動したのである。その後、黒澤は、正造らのバックアップで京北中学に再入学し、卒業後は北海道に渡り、宇都宮牧場の住み込み牧夫からはじめて、苦心のあげくに酪農家として成功するようになり、やがて酪農学園や雪印乳業を創設するにいたつた。田中正造が、本当に心を許すことのできた数少ない人物のうちの一人であった。
- また、伊藤野枝が社会問題に目ざめたのも、足尾鉅毒問題の谷中村問題が契機であったことは、有名な話である。
- (18) 『早稲田學報臨時増刊』第九四号、一九〇三年二月二〇日発行。なお、この資料と、後述する『早稲田大学校友會會員名簿』は、早稲田大学の佐藤能丸氏より提供いただいた。
- (19) 熊本県関係者では、高木と同時に卒業した人物に内田益三(熊本県下益城郡河江村九)がいるが、前述したように内田も鉅毒救済運動にかかわっている。
- (20) ここで、参考までに、高木の「入社辞」を全文紹介しておこう。

足尾鉍毒問題と学生運動（小松）

入社の辞

静風 高木 来喜

春浅く、浅間の山未だ色めかざるの頃、初めて筆を朝報紙上に執りし者、如何なれば今此檄場に読者と相見ゆるに至りしか。仔細は敢て大方の高察に委ねんこと朝報経営者に対する友情に副ふ所以なるべし、唯余が出来得る限りの微力を編輯に致せしことは同紙読者の諒とせらる、所なるべきを信ずる事、並に同社の経営方面には一切相関せざりし事、及び今回の成行に就ては主幹者と余との間に何等の阻滞なく心胸釈然たるものありし事、此三点は是を明かにして聊か出所進退の所以を公にするの要あらん。

翻て思ふ、本来無一物、渺たる新入の措大、而かも幸に官民識者の深厚なる同情の播籃に抱かれ、今又文筆の立場を失せんとせしに際し操觚先の先達民友社は多大の好意を以て相迎へらる、衷心の感謝何ぞ堪べけんや、嗚呼岳南幾多新知の高懐、如何にしてか之れに酬らん、他なし、唯自己の本領を發揮せんのみ。吾人の本領は極めて簡單なり、曰く、

「文章言論以て世を益し人を利せん」之れ以外に本領なく天職なし、希望なく目的なし、若夫れ経世的見地の如何を問はんか、内に向つては立憲主義、外に対しては平和主義、以て国運の開展を図る事、直截鮮明唯是れあるのみ、民友社の綱領亦敢て異なるなきを信ず。終に臨んで文筆の植場一層広汎にして更に多くの読者と相親むの機会を得たりしを喜び、併て旧朝報読者も亦本紙に於て再会の好機を得んことを望む。所感の一節を写して入社社の辞に充つ。（「静岡民友新聞」一九〇八年七月二日。なお、本資料は、静岡県近代史研究会の春山俊夫氏から提供していただいた。）

(21) 静岡県茶業組合聯合会議所発行「静岡県茶業史」一九二六年、一一五三頁。

(22) 同前、七七七頁。

(23) 【静岡新報】一九二三年一月一六日付紙面に、次のような記事が掲載されている。

○静岡新聞創刊 高木来喜氏を主幹とせる静岡新聞は当市江尻町十三番地同社より発行さるる毎月三回政治経済に関する公平なる批評をなし併せて立憲青年の機関たるを期するもの印刷鮮明にして体裁宜しき新聞にて代価一部金三銭なり

このように、月三回発行の新聞であつたらしく、いつまで発行されたか定かではない。翌一九一四年九月二十九日に、全く同名の「静岡新聞」が創刊されているが、こちらは日刊新聞であり、高木が関与した「静岡新聞」との関係は不明である。

(24) 上田稷一氏のご好意により、その書簡を紹介させていただきたい。なお、この書簡は、神崎清編「大逆事件記録」第三卷（世界文庫、一九七二年）に収録されていることも、あわせてご教授いただいた。

〈表書き〉 熊本市本荘村白川端 金子殿方 新美江謙 君

〈裏書き〉 静岡市東鷹匠町百十番地 高木 来喜 明治四十三年四月廿六日

右在中書状文言

其後君が消息を聞かず如何ならんと存じ居り候ひしに突然御書面に接し御壮康の由先づ以て奉賀候小生事今は「民友」に居らず君に対

する返書が期遅れしは落手の期漸く今日にあればなりと云へば遠隔のこと其れでも御茶は濁さるべきも嘘は不相変言い度くない、全くの処付箋して民友から廻し来たりそいつを多忙イヤ是れは云ひぬけてない実以て目の廻る程劇忙を極めた（有体に云へば僕は今度雑誌を初めた「茶業界」と云ふ其用混雑と鼎茶業（此処三字不明、おそらく「青年会」であろう。小松注）の創立其準備や演説やで寸暇なしと云ふ有様昨日ヤット出来上つたから禿筆をとる）為めに失礼仕り候処で目下の処朝日報知国民等東京紙の侵入にて民友すぐ影響を及ぼされ余は推して知るべきに候地方新聞は中々の苦戦、さらばとて別段適當の地位を見出す能はざるを悲む、小生も御承知の通り腕一本で其後東京横浜と経めぐり静岡朝報に主筆となり少し計りやつて見た、案外手答へがあつたから今度は民友に入つて昨年如きは当市未曾有と云ふ大活劇をやつた市民大会を打開いて主務省へ押かけて激戦月余トト勝を占めた、今は沈黙時代さ、あれは一寸手際を見せた迄の事、人間はのべつ騒いで居ては駄目だ君は九州で地盤を作れ、九州文だけは丸めてをいて呉れ、奮闘活躍には相當の準備が入る何か一仕事しなければ腹が癒へない、君と相会するの機会も其内あるだろう

復位はしやうではないか  
右御返事旁早々

四月廿六日

江齋君

静風

茶業界一部御送付可申上候之れは僕の手なくさみに候

住所が、「早稲田大学校友會會員名簿」とはやや異なり、「静岡市東鷹匠町百十番地」となっていることにも注意しておきたい。  
(25) 上田稷一・岡本宏編著「大逆事件」と「熊本評論」一五九頁（三一書房、一九八六年）。

(追記) 本稿の作成にあたっては、静岡県近代史研究会の春山俊夫氏、早稲田大学の佐藤能丸氏、それに熊本近代史研究会の上田稷一氏の各氏に貴重な資料を提供していただいた。特に、春山氏には、静岡における新聞関係の調査をほとんどやっていただき、感謝の言葉もない。三氏に心からお礼申し上げたい。